

北九州市立大学
文学部紀要

第84号

— 目 次 —

- 「くだものいそぎ」とは何か
物語を動かす類型—観音利生譚の一形態と仮名本『曾我物語』卷三をめぐる—
仮名本『曾我物語』の五郎像と源義経—斬り合う太刀の象徴するもの—
渡瀬 淳子 …………… 1

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2015

物語を動かす類型—観音利生譚の一形態と仮名本『曾我物語』卷三をめぐって—

渡瀬淳子

はじめに

応永二五年の正月、伏見宮貞成王は足利義嗣の殺害^{*1}に
連してある物語を思い起こしていた。

…焼亡最中亜相〔足利義嗣*引用者注〕旧宅に六歳男子
〔嫡子〕。二歳男子等。母儀乳母懷抱之処押寄奪取伊勢宿所
へ被渡。母乳母等叫喚。其有様平家六代御前被召捕時も如
然歎云々。(『看聞日記』応永二五年正月二五日条)

義嗣の遺児が連れ去られ、その母親や乳母が泣き叫んだと聞いて『平家物語』卷十二「六代」の物語を想起しているのである。平維盛の遺児六代は、清盛—重盛—維盛—六代と続く平家の嫡流であるため、鎌倉幕府が血眼になって探していた。六代は母親たちに匿われ大原の山荘で息を潜めて暮らしていたが、ある日密告によって六代たちが暮らす大原の山荘に北条時政の使いが訪れる。おそらく、貞成が想起したのは「六代」の以下のような場面であろう。「めのとの女房も御まへにたふれ臥し、声もおしましおめきさげぶ。日頃は物をだにもたかく言はず、しのびつゝかくれゐたりつれ共、いまは家の中にとあるもの、

こゑを調べて泣きかなしむ…」(『平家物語』新日本古典文学大系 岩波書店)

貞成が日頃平曲に親しんでいた^{*2}という彼自身の教養の素地によるところは大きい。以上のことは、戦乱や政争によって敗者となった者の子供のありようを語る場合の典型として「六代」の物語類型が機能していた傍証となるであろう。子供を連れ去られて母親や乳母が泣き叫ぶという場面は六代の物語と密接に関連している^{*3}。

敗者の子供ということ言えば、『平家物語』の「六代」を意識したであろう物語が『曾我物語』にある。それは曾我太郎祐信が幼い継子達の助命を嘆願したという話で、仮名本に詳しくい。継父である曾我祐信のもとで暮らす河津三郎の遺児一万・箱王の兄弟は、祖父伊東祐親が頼朝に叛逆したかどに連座して鎌倉へ召し出され処刑されることとなった。使いの梶原景季が祐信の館を訪れその旨を告げると、祐信とその妻(兄弟の母)は嘆き悲しみ取り乱す。「かちはだしにて、乳母もろともに、庭上にまよひいでて、『しばらく、や、殿、一万。とゞまれや、

箱王。わが身は何となるべき』と、声を惜しまずなきかなしみければ：*4」その後、由比ヶ浜へ引き出された兄弟は、曾我祐信の必死の懇願と、それに心を動かされた御家人達の訴えにより、ついに頼朝から許される。

仮名本の卷三のほぼ全ては、幼い曾我兄弟の処刑をめぐる話で構成されている*5。卷三が幼い兄弟の処刑と助命嘆願の物語であることから、語り手も読者もともに興味のある物語であったと思われる。それは、類話が幸若「切兼曾我（一満箱王）」、謡曲「切兼曾我*6」としても存在し、真字本には「その故は鎌倉殿石橋山の合戦に打負けて杉山に入せ給ふ時、梶原平三景時、曾我殿と二人心を合せて助け奉りし故に駿河国八郡の大介になされしその御恩をば皆進せ上げつつ、『二人の幼き者共を助けて賜らむ』と申しければ、鎌倉殿哀れませ給ひて、『それ程の忠ならば二人の子共をば助信に預くるぞ』と仰せ下されし故にこそ、己らは安穩にて今まで希有の命をば持ちたれ*7」という仮名本とは違ったかたちの話が語られており、この物語に様々なバリエーションがあったことが窺えることから諒解される。中世の人々が高い関心を寄せた物語であることは間違いない。

曾我兄弟の処刑をめぐる物語にはいくつかの問題点が含まれている。類似の物語が多数存在することから、これが類型を利用した語りであると考えられることや、この物語内で兄弟を慈しみ可愛がる優しい父として描かれる曾我祐信が、巻四では一

転して冷淡な父となる*8という人物造形の矛盾があることなどである。こうした問題を、物語が持つ類型をもとに考えていきたい。それにより物語をかたち作り動かすタイプの働きが見えてくるに違いない。

『平家物語』巻一二「六代」と仮名本『曾我物語』巻三

「六代」と仮名本『曾我物語』巻三の物語はほぼ同じ構成になっっている上、細部もよく似ている。大原の片隅で人目を避けてひっそりと暮らす維盛の妻子のもとへ、頼朝の命を受けた北条時政の使いが訪れるのに対応するかのようには、仮名本『曾我物語』では、継父のもとで母と共につつましく暮らす曾我兄弟のもとへ梶原景季が使者として向かう。六代の所在が知れたのは「ある女房」の密告であったし、曾我兄弟の存在が頼朝に知れたのも工藤祐経*9の密告であった。使者を前にして「母上は若君を抱え奉つて、只われを失へやとて、喚き叫び給ひけり」（六代）「…たゞもろともに具足して、とにもかくにもなしたまへ、となきかなしむその声は、門のほとりまできこへける」（仮名本『曾我物語』）と嘆き悲しむ母や女房達や、けなげに振る舞う主人公の描写など、至る所に影響が見られる。

若君母うへに申させたまひけるは、「つみにのがるまじう候へば、とくとく出させおはしませ。武士どもうち入てさがるものならば、うたてげなる御ありさま共を見えさせ給ひなんず。たとひまかり出候とも、しばしも候はば、いと

まこふてかへりまいり候はん。いたくな歎かせたまひ候そ」と、なぐさめ給ふこそいとおしけれ。(六代)

一万おとなしやかに、「あまり御なげき候ぞ。御おもひを見たてまつれば、道やすかるべしともおぼえず。もしきられまいらせば、前世の事とおぼしめせ」といひければ、箱王、「兄のおほせせらるゝごとく、御なげきを御とどめ候へ。おなじ御なげきながら、敵をいたしたる事も候はず。

その上、いまだおさなく候へば、御ゆるしも候べし。仏にも御申候へ」。まことにげにぐしく申につけても、いよ／＼名残ぞおしかりける。(仮名本『曾我物語』)

六代も一万・箱王も、狂わんばかりの母親を氣遣つて、召し出されたからといって即処刑ということにはならないだろう、だからあまり歎かないように、という類似した趣旨の発言をしている。主人公の助命嘆願に第三者が関わるのも両者で共通しており、六代の場合は僧侶の文覚が、曾我兄弟は梶原景季や畠山重忠などの御家人が、それぞれ頼朝に助命を願う。主人公を迫害するのが頼朝であるという点も同じだ。

物語の山場であるいよいよ処刑という場面で、斬り手があまりの哀れさに太刀を投げ出してしまふところも、両者で共通している。

狩野工藤三親俊切手にゑらばれ、太刀をひそばめて、左のかたより御うしろに立まはり、既にきり奉らんとしけるが、

目もくれ心も消はてて、いづくに太刀を打つくべしともおぼえず。前後不覚になりしかば、「つかまつとも覚候はず。他人に仰付られ候へ」とて、太刀を捨てのきにけり。「さばあれきれ、これきれ」とて、切手をえらぶ処に、… (六代)

堀の弥太郎、太刀ぬき、引きそばめ、二人が後ろにちかづきて、兄をまづ切らんは、順次なり、しかれども、弟見て、おどろきなんも、無慙なり、弟をきるは、逆なりと、おもひわづらひ、たちたりしを、祐信、思ひにたへかねて、はしりより、とりつき、「しかるべくは、打物をそれがしにあづけられ候へ。われらが手にかけて、後生をとづらはむ」と申ければ、「御はからひ」とて、太刀をとらせけり。祐信とりて、まづ一万をきらむとて、太刀さしあげみれば、折節、朝日かゝやきて、しろくきよげなる首の骨に、太刀影のうつりて見えければ、左右なくきるべき所も見えざりけり。祐信、たけき物のふと申せども、打物をすてて、くどきけるは、「なかなか思ひきりて、曾我にとゞまるべかりしものを、これまできたりて、うきめを見ることのくちおしさよ。しかるべくは、まづそれがしをきりて後に、かれら害したまへ」となげきければ、見物の貴賤、「理かな。幼少よりそだてて、あわれみ給へば、さぞ不便なるらん」と、とづらはぬ者はなかりけり。(仮名本『曾我物語』)

「六代」では切り手が惻隱の情に堪えかねて六代を切れずに太刀を捨ててしまい、周囲の者たちが互いに切り手の役を押しつけ合う。仮名本『曾我物語』では切り手が兄と弟どちらを先に切っても可哀想だと思ひ悩み、見かねた継父が他人の手に掛けるよりは、と切り手を買って出るが、子への愛情から切れなくなってしまう、太刀を投げ出してしまふのである。憐れさのあまり、切り手が何処を切つたらいいのかと悩みたためらう点も共通している。仮名本『曾我物語』が「六代」の趣向を借りているのは明らかである。

また、主人公となる六代の年齢が一二歳であるのに対し、曾我兄弟も兄が一歳、弟が九歳と近い年齢に設定されている。元服前の十歳前後と十代前半という年齢は、大人と子供の境目と認識されていた^{*10}よう、意図的にこの年齢に設定されたものと考えられる。

このように、二つの物語には、描写の面でも趣向の面でも共通点が多く、仮名本『曾我物語』が『平家物語』巻十一「六代」を意識していたことは間違いないであろう。

観世音菩薩普門品の類型

二つの物語の共通点は描写の類似にとどまらない。助命の願いが叶ったことについて「観音の利益」が言われている点も同じである。覚一本『平家物語』の「六代」では、六代の母が日頃長谷寺の観音を信仰していたことを始め、文覚が助命を請

け負ったところで「ひとへに観音の御たすけなれば」とあり、また母親の夢に六代が白い馬に乗って現れる^{*11}など、随所に観音信仰との関わりをもつ言説がちりばめられている。同様に仮名本『曾我物語』でも曾我兄弟の母親が日頃から普門品を誦していたことが書かれており^{*12}、同じ題材を元にした謡曲「切兼曾我」でも観音に祈る言葉があり、兄弟の命が助かったのは観音の利益であるように読める^{*13}。

これらの物語の基底に法華経、特に観世音菩薩普門品（観音経）の影響があることは疑いない。周知のごとく、観音経は観世音菩薩の多種多様な利益について説かれており、著名な「或遭王難苦、臨刑欲寿終、念彼観音力、刀尋段段壞（或いは王難の苦に遭いて、刑に臨みて、寿終わらんと欲せんに、彼の観音の力を念せば、刀尋いで段段に壞れなん）」等の偈が示すように、観音を念じれば、処刑されそうになっても命が助かると信じられてきた。「六代」の末尾が「罪ある人も罪なき人も」と結ばれていたのも^{*14}、処刑の直前で切り手が太刀を投げ出してしまふのも、「刀尋段段壞」に基づくものとみてよいだろう。

『平家物語』の研究史上、六代の物語は長谷の観音信仰に基づいたものであり、長谷寺周辺で作成され流布していたものとされてきた。特定の寺院で説話の管理が行われていたかどうかはともかく、観音経に基づく物語が一つのパターン、即ち「権力者による主人公の迫害」↓「権力者への助命嘆願」↓「危うい所での救済」という類型を形成しており、様々なバリエーション

ンをもって展開していたことは間違いない*15。

このパターンを踏まえた作品として他には謡曲「籠祇王」、
「盛久」とその類話である長門本『平家物語』卷二十の盛久関
連話、延慶本『平家物語』卷十二の三五「肥後守貞能」、『平治
物語』の常磐御前と三人の幼い子供達の物語などがある。常磐
の物語では、観音利生譚に孝子譚が組み合わされ、その上頼朝
の助命譚と同時進行で語られるという複雑な構成になっている
*16。ものの、物語の基底にあるのは観音信仰によって処刑され
るべき幼い子供達の命が助かるという枠組みである。ここでも
やはり常磐母子が助かったのは観音の利益とされており、例の
類型が、ある程度の普遍性に似た拮据と、バリエーションを
許す厚みとをもっていたことを思わせる*17。

類型の展開

処刑の直前で命が助かるという「刀尋段段壊」にもとづく類
型の物語で文献上最も古いものは、おそらく『日本霊異記』の
卷下第七「被観音木像之助脱王難縁（観音の木像の助けを被ふ
りて、王難を脱れし縁）」であろう。その内容は以下のとおり
である。主人公の丈部山継は蝦夷地に征人として赴き無事帰還
して以来、妻と共に深く観音を信仰していたが、称徳天皇の御
代に藤原仲麻呂の乱に遭い、逆賊として捕らえられ処刑される
ことになる。山継が首を切られる番になり心乱れていると、彼
の前に観音像が現れ山継を叱咤し、彼の首の後ろから足を踏み

通して行藤のように穿いてしまった。刑吏が山継の首を引き延
べいよいよ切られるというその時、処刑の中止が言い渡され、
山継は流罪となる。その後山継は無事官職に復帰し、出世を遂
げた*18。この話は観音経の偈に基づいて作られていると指摘
されており、王難を免れるだけでなく、物語の導入部では賊難
を免れる利益が*19、末尾では出世と繁栄の利益も語られてい
る。但し中心となる王難を免れた物語は処刑の直前で観音が助
けに来るという簡潔なもので、権力者（帝）に対する助命嘆願
などの要素はみられない。

「刀尋段段壊」の類型は、『日本霊異記』の後の説話集など
にはあまりみられなくなる。『今昔物語集』には、処刑の直前
で助かる話が二話確認できるが、それぞれ釈迦如来と地藏菩薩
の利益であるとしている*20。『宇治拾遺物語』では観音の利益
のうち、処刑を免れる話は語られず、『古本説話集』にもない。
しかし、観音経の「刀尋段段壊」の偈が流布していなかったか
といえ、そうではない。『落窪物語』の卷二、落窪姫の夫で
ある少将道頼に仕える帯刀と、その母である道頼の乳母が以下
のようなやりとりをする場面がある。

「よしよし、なほ申しそそのかさむと思し召したり。ただ、
惟成、法師になりはべりなむ。」とて剃刀、脇にはさみて
持たり。「また言ひ出でたまはむ折、ふとかきそらむ」と
て立てば、おとど、一人子なりければ、かく言ふを、いと
いみじと思ひて、「口から、いとゆゆしきことを聞くかな。

はさみたらむ剃刀や、打ちや折らぬと試みよ」と言へば、
 帯刀みそかに笑ふ。(稲賀敬二校注 新潮日本古典文学集
 成『落窪物語』 新潮社 一九七七年)

これは主人の道頼によい身分の妻を世話してやりたいという乳母の親心が裏目に出て、息子の帯刀と言い争いになったあげく、帯刀に「再び少将と落窪姫の仲を裂くようなことを計画したら、私はこの剃刀で髪をそり落とし出家します」と言われ、悔し紛れに乳母が「その剃刀は（私がお前を出家させまいと観音を念じる力で）折れるだろうからやっつてごらんさい」とやり返す場面で、こうした日常会話の中に何気なく差し挟まれていることから、観音経の「刀尋段段壞」が一般的な知識として広く浸透していたことは諒解されよう^{*21}。その後、この類型が文学作品に頻りに現れるようになるのは主に軍記物の中においてである。それまで観音の利益として語られた主なものには福徳を授かるものや病気の治癒だった。命が助かる話の多くは海難事故^{*22}や盗賊の暴力からの救済となっており、そのうち太刀が折れて助かるというものは、管見のかぎり、発見できていない。

『平治物語』の常磐母子の物語は、先に述べたようにいくつかの要素の組み合わせた複雑な作りになっている。母子の助命嘆願もはつきりした形では出てこない^{*23}。常磐たちの助命は頼朝の助命と連動しており、それに關して実際に動いたのは池禪尼である。また、頼朝の救済は八幡神の加護とされており、観音信仰とは別の扱いになっている。とはいえ、ここにも権力

者による迫害↓助命嘆願↓救済という一貫した流れがみられるのである。

延慶本『平家物語』卷十二の肥後守貞能になると、観音への信仰によって処刑されそうになっても処刑人の太刀が折れて助かるという、偶そのままの話になっており、太刀が折れたことを受けて権力者（頼朝）に助命を願うという流れになっている。この物語では助命を願うに行くのは観音自身で、長門本『平家物語』卷二十・謡曲の「盛久」も同様である^{*24}。盛久は関東の武士に捕縛され、日頃信仰する清水観音に後世の救済を願い鎌倉へ下った。いよいよ由比ヶ浜で処刑というその時、処刑人の太刀が真中から折れ、再び切ろうとした太刀も目抜から折れた。これを頼朝に報告すべく由比ヶ浜から使者が発った同時期に頼朝の夢に清水寺の観音が現れ盛久を許してくれるよう願うのである。貞能の話と盛久の話はよく似ており、物語の展開だけでなく、処刑の場面で太刀が二度折れることや観音が直々に頼朝の夢に現れて助命を頼む点、信仰しているのが清水観音である点、刑場が由比ヶ浜である点など、細かい部分まで一致している。太刀が二度折れるというのは『法華直談鈔』^{*25}では「四二若復有人ヨリ下ハ刀杖ノ難也。刀尋段々壞ト者、以一刀切其太刀折故二、又別太刀ニテ切又折故三、刀尋段々壞ト云也」と説明されており、こうした法華経注釈の影響を受けたものと考えられる。

謡曲「籠祇王」は、罪人に同情して牢から逃がしてしまった

老人が、その罪科によって処刑されそうになるが、刑吏が太刀を取り落とし、二つに折れて助かるという話である。老人の娘である祇王^{*26}は、父親のために清水の観音に参籠していたところ、父が囚われたと聞いて故郷の紀州へ戻ってくる。帰郷した娘に父は、罪人を逃がした理由を同情だけではなく「其上観音の御誓ひにも。身にかへて人をばたすけよと也」と、観音の教えを实践したのだと説明し、娘も「扱は人を助給ふ御科ならば。却て御歎びにや成べき。慈眼視衆生の誓を頼み。観音を念じ給ふべし」と応じるなど、観音信仰を前面に出している。処刑の場面では、親子は互いに父が法然上人からもらった数珠を娘へ、娘が清水で読んだ観音経を父へと交換し、「既に時刻に成しかば。彼老人の首討んと。太刀振上ればこはいかに。御経の光眼にふさがり。取り落としたる太刀を見れば。二つに折て段々と成。」となつて命が助かるのである。物語の最期は「或遭王難苦……」で始まる刀尋段々壊の偈で締めくくられている^{*27}。

また、『沙石集』卷二の右馬允明長の話は、薬師・観音の利生ということで致命傷からの回復と処刑直前の助命が組み合わされている。喉笛を突かれた瀕死の明長に対し薬師が手ずから薬を調合して与え、明長が関東の武士に見つかり捕虜となつた後も、観音が身を投げようとする明長を励まし、処刑の直前まで「必ず助ける」と救済を約束する。明長は処刑場で「年来の知音」に行き合い、彼の申し出によって北条義時から許される。これは承久の乱の時、京方の兵として闘った明長の話で、戦語

りの一つと言つてよい。こうした戦語りの中にも「刀尋段々壊」の型が取り込まれているのである。

前述した『法華直談鈔』には、観音の利生で処刑を免れた典型として盛久の名がみられ^{*28}、その他にも二つの類話が引用されている。一つはやはり「刀尋段々壊」をそのまま説話化したような話で、金で小さな観音像を作つて髪の中に入れていた男が、王命に背いたかどで死罪となり、太刀で首を刎ねられる際、観音像が身代わりとなつてくれたため、三度切られたが三度とも太刀が折れ、終に許されたというものである。もう一つは継子いじめ譚の中に観音の利生の一つとして処刑を免れる話が語られている。ある娘は大変美しかったので太子の后となることが決まっていた。継母はこの娘を憎み、娘が隠れて男を通わせていると讒言する。父親はそれを信じ娘を山奥へ連れて行き斬首させ、その首を埋めた。ところが帝が狩のため山へゆくと美しい娘がいる。不審に思つて尋ねると娘は事の顛末を語つた。不思議に思つた帝は娘を王宮へ連れて帰り、家臣に使いを出した。父が娘の首を確かめると、それは二つに切られた観音経であった。帝は娘の信仰心に感心し、改めて太子の后とした、というものである。

ここで分かることは、この類型は、観音信仰によつて処刑直前で助かるという基本の構造に、様々な要素を組み込みながら展開していたということである。観音経の偈を踏まえながらも処刑の直前で処刑人の刀が折れて命が助かるという単純明快な

構造の話ばかりではなく、最も特徴的な「刀尋段段壊」についても、必ずしも太刀が折れるという奇瑞を必要としてはいない物語が複数存在する。「刀尋段段壊」は処刑、特に斬首刑からの救済という大まかな理解のされ方をしていたかのようである。

軍記と「刀尋段段壊」の類型

軍記物の中にこの類型が多く見られる理由の一つに、戦乱の時代になって、死刑、特に刃物による斬首刑が現実味のある災難として意識されたことが考えられる²⁹。信西が保元の乱で死刑を復活させるまで、平安時代の三〇〇年ほどの間、理不尽な暴力や私刑はいくらでも行われただろうが、公の死刑が皆無であったことは言うまでもない。最も重い刑罰が流刑であり、王権が死刑を執行することはなかった時代に「王難」による処死には現実感が伴っていなかったのではないか。そのため、福徳授与や病氣平癒といった、もっと身近で現実的な利益の方が大きく喧伝されてきたと考えられるのである。

もう一つには、この類型の持つ緊迫した物語構成が挙がるだろう。処刑の直前で助かるという筋立ては必然的に場面に緊迫感を与え、物語を盛り上げる。語り物には好まれた趣向だったはずである。「六代」でいうならば、鎌倉へ下った文覚が戻ってくるのを待つ場面である。約束の二〇日間はとうに過ぎて、北条時政は六代をつれて鎌倉に向けて出発する。宿場ごとにここで斬られるのではないか、という六代の絶望的心境が繰り返

し語られ、読者は文覚の到着を六代や彼に付き従う齋藤五・六のような気持ちで待ちわびながら読み進めることになる。千本松原でいよいよ処刑というその時、遠くから文覚が笠を振り上げ走ってくる、という場面に至って緊張は解けて、「齋藤五、齋藤六はいふに及ばず、北条の家の子郎等どもも、皆悦びの涙をぞながしける」と一気に大団円へと流れてゆく。

こうした物語の構成を可能にしたのは助命嘆願という要素であった。観音の利生によって土壇場で処刑人の刀が折れる、という単純な話は、助命嘆願という要素を入れることによって奥行きを獲得した。助命嘆願の部分に時間の制約というアレンジが加えられることによって、嘆願は聞き入れられるのか、聞き入れられたとしても許しの使者は処刑までに間に合うのか、という新たな緊張を作り出す。

また、「六代」においては主人公の助命に文覚が多大な影響を及ぼすように、観音信仰よりも文覚の行動が全面に押し出されている。常磐の物語でも、全体的に観音の利生を強調する文言や描写はみられない。軍記物語の中でこの類型は、観音信仰を基底に抱えながらも、現実世界に生きる人間の姿や行動に重きを置いた描写へと質的な変化を遂げているのである。神仏の加護よりも人間主体のドラマへと変化していながらなお、観音信仰を切り離せなかったというこの事実を、逆に、処刑の直前で助かるという物語の類型が観音利生譚といかに強固に結びついていたかを表している。

曾我物語の中の類型

仮名本『曾我物語』の場合は、助命嘆願の部分に頼朝と畠山重忠の論争が加えられ大きく肥大化した。そのため、物語の興味は頼朝と畠山重忠のやりとり、特に畠山の弁舌の面白さに移ってしまい、「六代」のような緊張を維持した語りではなくなっている。加えて「六代」もそうであったように、現実世界で主人公たちの助命に奔走するのは観音ではなく、曾我兄弟の継父やその思いに共感した御家人達となっており、全体的に観音信仰の要素は薄められている。しかしそれでも仮名本『曾我物語』卷三の物語は、「…毎日に三巻の普門品をおこたらざるしるしに、かれらが命をたすけたまへ」と子供たちを連れ去られた母親が祈念するように、あくまで観音利生譚、「刀尋段段壊」の枠に規定された語りであった。土壇場での助命、太刀を擲つて処刑人といった物語にちりばめられたモチーフは「刀尋段段壊」の偈と分ち難く結びついていたものと思われる。

類型にはまた、このような物語の大枠を規定するもの他、細かい場面ごとの具体的描写として物語の一部を構成するものがある。仮名本『曾我物語』でいうならば、「刀尋段段壊」の類型が物語の大枠を規定し、その中の場面毎の描写には先行する軍記物などに見られる人物描写の類型が用いられている。例えば、処刑の場面で、「兄をまつきらは、順次なり、しかれども、弟見て、おどろきなんも、無慙なり、弟をきるは、逆な

り」と、兄を先に斬るべきか、弟を先に斬るべきか悩む堀弥太郎の姿は、『保元物語』で為朝の幼い弟達が斬られる時に、中でも年長の乙若が「…其の上少者共、我切れん有様をみては、強に怖恐れんずれば、先彼等をさきだてんとおもふぞ」と言う場面を想起させる。曾我祐信は見るに見かねて「しかるべくは、打物をそれがしへあづけられ候へ。われらが手にかけて、後生をとぶらはむ」と言うが、我が子への最後の愛情として、他人の手に掛けるよりは、と自らの手で子供の首を斬る父親像は『平家物語』の「瀬尾最後」などに見られる^{*30}。実の息子を殺めたわけではないが「敦盛最期」の熊谷直実のありようも同様だろう。直実もまた、息子に重ねて見てしまった武将敦盛を、他人の手に掛けるか自ら打つかの選択を迫られ、自らの手に掛けることを決意するものの、憐れさの余り、何処に刀を当てたらいいか、と歎くのである^{*31}。このように類型を利用した描写は、一つの物語の上に、類似するいくつもの物語・場面を重ね合わせる効果を持つ。物語は、それ単独で存在しつつも、他の物語とも緩やかに繋がりが広がってゆく。

おわりに

仮名本『曾我物語』は、物語の大枠においても、場面ごとの描写においても、先行する物語の描写を利用して組み立てられていることが多いテキストである。卷三では、物語の大枠を形作っているのは「刀尋段段壊」に基づく観音利生譚の類型であっ

た。そして、細かい場面毎の描写には先行する『平家物語』などの軍記物に現れる人物の類型を利用しているのである。曾我兄弟を取り巻く登場人物、特に継父である曾我太郎祐信の造形も、この場面毎の人物類型に大きく影響されている。曾我祐信の描かれ方は、『平家物語』の瀬尾太郎や熊谷直実の心情とも共通しており、この点から巻三の場面において彼は「慈父」としての役割を担っているものと考えられる。それが巻四になつて一転して冷淡な父となるのは、物語の枠組みを規定する類型が父恋い譚に変わったからである。主人公の箱王（後の五郎時致）が亡き父を慕い父を渴望する物語では、継父は存在しないか、いるなら冷淡な父でなくては話にならないからであり、祐信の二面性を表すものではない。そもそも『曾我物語』に長編小説として首尾一貫した構成のもとに人物造形を行うつもりなどなかったのではないか。『曾我物語』にとつて長編物語とは、あくまで個別具体的断片的挿話の積み重なりで織り上げられてゆくものであったとおぼしい。よつて、巻が変わり、場面が変わり、物語を動かす枠組みが変われば、それに合わせて登場人物も役割を変えるのである。人物造形の一貫性のなさはこうしたことに由来するのであろう。仮名本において和田義盛が、ある時は曾我兄弟の庇護者として、ある時は敵対関係となつて現れることについても同様の理由によると考えられる。

こうした特徴は、『曾我物語』以外の古典テキストにも、程度の差こそあれ、まま見られるものである。この現象は物語作

者の力量や教養レベルの優劣によるものと考えるより、前近代的世界の物語創作法に由来すると考えた方がよいであろう。

*1 応永二五年一月二四日、足利義持が富樫満成に命じて出家後幽閉されていた義嗣を殺害させた事件。出家後の足利義嗣は『看聞日記』の本文中では「押小路亜相禅門」「押小路亜相入道」などと呼ばれている。なお、義嗣は光源氏の再来ともてはやされた美貌の貴公子であり、維盛との共通性を感じる。

*2 『看聞日記』中には全体を通して琵琶法師の記事が多く、中世の平曲を知るための重要な資料となっている。貞成王は様々な芸能を深く愛好したが、平曲にいたってはしばしば曲目を書き留めるほどの強い関心があった。

*3 子供を連れ去られ泣き叫ぶ母親（乳母）の姿は寛一本『平家物語』巻一一「副将被斬」に「二人の女房ども、若君を抱き奉て、只我々を失ひ給へとて、天に仰ぎ地に臥して、泣き悲しめども、かひぞなき」とあり、長門本『平家物語』巻一八「髑髏の尼」にも「：其後朽葉の衣着たる女房年廿二三と覚しきが、我子よくとなくく走るがあり。しばしこそ衣も肩に掛り、うらなしもはきたりけれ、後にはきぬもぬぎ、うらなしもはかず、若君よといふ声もたてず、あゝといふ声ばかりにて走る女房あり」と描かれているが、類似した展開の物語が多くある中で、貞成が想起したのは他でもない「六代」の物語であった。

*4 以下、仮名本『曾我物語』の引用は日本古典文学大系（岩波書店）を用いる。

*5 卷三の章段名を古活字本によって挙げると次のようになる。「九月名月にいで、一万・箱王、父の事なげく事」「兄弟を母の制せし事」「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」「母なげきし事」「祐信、兄弟つれて、鎌倉へゆきし事」「由比のみぎはへひきいだされし事」「人々、君へまいりて、こひ申さるゝ事」「畠山重忠こいゆるさるゝ事」「臣下ちやうしが事」「曾我へつれてかへり、よろこびし事」このうち、兄弟の処刑をめぐる物語は「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」から始まり「曾我へつれてかへり、よろこびし事」までである。分量にして大系本で二十四頁、卷三が全部で二十八頁なのでほぼ兄弟の処刑をめぐる話で構成されていることになる。

*6 謡曲「切兼曾我」は近世初期頃の作とされ厳密には中世の作品ではないが、中世文化の残照と考え、取り上げることにした。

*7 幸若「切兼曾我」（文禄本）にはこの梶原景時と曾我祐信が協力して頼朝を助けた話が出てくるが、曾我兄弟の助命は畠山重忠の申し出によって叶うことになっている。

*8 巻四「箱王、箱根へのぼる事」では、いつも実家からの贈り物や手紙が絶えない周囲の稚児たちとはちがつて、たまに母親からの贈り物や手紙があるだけの箱王（後の曾我五郎）が、父親からの手紙の無いことを「曾我殿はましませども、一度の

ことづてにもあずからず」と嘆いており、ここでの祐信は冷淡な継父となっている。

*9 工藤祐経は曾我兄弟の祖父である伊東祐親に所領を横領され（祐親は祐親で、本来自分が相続するはずの所領を工藤祐経とその父祐継に横取りされたと思っている）、祐親に恨みを抱いていた。祐経の放った刺客は伊東祐親を打ちもらし、祐親の息子河津三郎を殺した。こうした経緯から曾我兄弟は祐経を父の敵とし、祐経も河津三郎の遺児である曾我兄弟たちに警戒心を抱いていた。

*10 『平家物語』「六代」では「此日比平家の子どもとりあつめて、水にいろるもあり、土にうづむもあり、おしころし、さしころし、さまざまにすときこゆれば、我子はなにとしてかうしなはんずらん。すこしおとなしければ、頸をこそきらんずらめ。」と歎いており、『平治物語』では常磐が「今若殿はきるか、乙若殿をばさしころすか、無下にをさなければ、牛若殿をば水にいろゝか、土にうづむか」と心配しており、成人と子供では処刑方法にも差があったことがわかる。こうした母親達の歎きは、まだ幼い子供が、成人と同じように斬首されるのが忍びないという文脈なのであろう。『保元物語』では為朝の幼い弟達が処刑される場面で十三歳の乙若のみが状況を理解し迎えの使者にたいして不審を言うが、その下の十一歳、九歳、七歳の弟達は使者の言葉を素直に信じ疑いを持たない。こうした描写も類型的なものであり、やはり十代前半という年頃が大人と子供の境

目として、大人びた分別をそなえていながらも、まだ幼く哀れを誘う存在として描かれている。

*11 石山寺縁起卷七に以下のような説話がある。「正応のころ白河の辺にまつしき尼ありけり。下人けむそくもみなうせて、たゞ十八になりける女子はかり身にしたかふものにて有けるか、彼女女子ひとへに仏神の御たすけをたのみて、こゝかしこにまうて、はゝか有さまを祈りありきける程に或人の物語に石山の観音こそよろつの神仏のおめくみにもれむひとをたすけむといふ御誓はあるなれといふを聞て、当寺にまうて、祈申けれどもそのしるしもなかりければ、母をたすけむ為に大津の浦に行て身をうりてけり。そのかはりを母のもとにつかはして、さまぐありふへき世のわたらひなむとをしへをきて、則かいたる人にくして、打出の浜より船に乗てしらぬ浪路にこき出けるほどに、にはかに風はけしく浪あれて、乗りたるふね浪にしつみけるに、此女一すちに観音の悲願を念して、船のほはしらに取つきて水のうへにたゞよひありきける程に、白馬一疋浪にひかれてちかくよりたるにとりつきてさまぐにしてみきはにあまりぬ。みる人ふしきの思ひをなしてことのゆへをとふに、しかぐのよしをかたりければ浦人も孝養のこゝろさしふかくて、利生もあらたなりける事を感じて、母のもとにをくりつけぬ。かひとりつる主はすてに水にしつみければ今はぬしといふものもなかりける程に、おもひの外にひむよきたよりさへ出て、たのしきものゝ妻になりて、母をもやしなひ一期とみさかへたるものに

なりて、人にもうらやまれけるとなむ。」娘を助けた白馬は観音の化身であり、六代が白馬に乗っているのも観音の加護が彼に及ぶことを示唆しているのであろう。

*12 古活字本のほか、古態を残す太山寺本、古活字本と系統のやや異なる万法寺本、時代の下る流布本など、ほぼすべての本文にある。真字本で曾我兄弟の母が語る断片的な物語からは、真字本のそれが観音の利益を語る物語だったかどうかはわからないのだが、仮名本は元々観音利生譚としての性格を持っていたものと考えられる。

*13 母の台詞に「日頃頼みし観世音、誓ひの船の梶原よ」とある。

*14 観音経「七難」に「設復有人、若有罪若無罪。杻械枷鎖檢繫其身、稱觀世音菩薩名者、皆悉斷壞即得解脱（設い復た人有りて、若しは罪有り、若しは罪無きも、杻械・枷鎖、其の身を檢繫せんに、観世音菩薩の名を称せば、皆な悉く断壊して即ち解脱することを得ん。）」とある部分を踏まえた表現であろう。

*15 伊藤正義『謡曲集 下』新潮日本古典文学集成（新潮社一九八八年）によると、伊藤正義は「盛久」の改題で『観音経』刀尋段段壊の利生譚としての処刑を免れる話は、一類型として存在した。」といっている。

*16 以上は古態本や古活字本の構成であり、金刀比羅本では頼朝の助命の後に常磐母子の逃亡劇が置かれている。物語としては整理された形になっているが、頼朝が助かった後に、より年

少で身分も劣る常磐の息子たちに追手がかかるというのは、リアリティーを欠く設定であろう。常磐達が観音の利生によって救われるという構成は同じであるが、金刀比羅本では常磐が子供や母親のために自らを犠牲にする（具体的には清盛の愛妾と成るといふ行為で示される）という部分が強調され、観音利生譚としての性格は弱まっている。

*17 佐谷眞木人は「古浄瑠璃・説経とお伽草子 斬首救済説話をめぐって」の中で、このパターンの説話を「由比ヶ浜という場所と強固に結びついた、鎌倉の在地の説話として存在し、それがさまざまナリエーションで語られた可能性が高いと、私は考えている。」と捉えているが、本稿では由比ヶ浜という土地に限定された語りではなく、観音信仰に基づくもので、もっと広い、普遍性をもった類型であると考えている。

*18 以上、多田一臣校注『日本霊異記 下』ちくま学芸文庫（一九九八年）によった。観音が山継の首から足をさしとおして行跡の様に穿くという描写は意味が取りづらいのだが、この観音の脚が首から胴へ通ることによって山継の首が物理的に切り離し得なくなったことを表すのではないかと考える。

*19 観音経の偈に「或値怨賊繞、各執刀加害、念彼觀音力、咸即起慈心（或いは怨賊の繞みて各おの刀を執りて害を加うるに値わんに彼の観音の力を念せば咸く即ち慈心を起さん）」とある。

*20 卷一二「獨者、仏の助けに依りて王難を免れたる語 第一

六」、卷一七「地藏菩薩を念ずるに依りて、主に殺さるる難を遁るる語 第四」の二話。但し、『今昔物語集』には欠巻があり、かつて観音利生譚として処刑を免れる話が含まれていた可能性もある。

*21 新潮日本古典文学集成の稲賀敬二の解説にも「実は平安朝の読者たちにしたところで、『法華経』を完全に習得していた者は少なかったと思われる。しかし『法華経』を専門に研究しなくとも、当時広く行われていた法華八講などの法会を通して、あるいは説教の僧の口から、卑近な雑学的知識としてこの場面を理解するに十分な教養を読者は身につけていたと思われる。」とある。

*22 観音経の偈に「或漂流巨海、魚龍諸鬼難、念彼觀音力、波浪不能没」とある。

*23 常磐は落ち延びるにあたって清水の観音に参詣して子供たちの無事を祈っており、観音の助けがあったことは言うまでもないが、池禪尼が頼朝の助命のため清盛に積極的に働きかけたのに対し、常磐の子供たちのために助命嘆願を行う人物は物語中に登場しない。

*24 謡曲「盛久」については竹本幹夫『観阿弥・世阿弥の時代』明治書院 一九九九年、田口和夫「盛久説話の系譜―能（盛久）の視点から―」（麻原美子・犬井善寿『長門本平家物語の総合研究』論究編 勉誠出版 二〇〇〇年）に詳細な論考がある。

*25 池山一切円編『法華経直談鈔』（寛永十二年板本の複製）

臨川書店 一九七九年 によった。なお、引用した部分については室町末期の古写本（妙本院蔵本・疎竹文庫蔵本／『法華経直談鈔古写本集成』所収 臨川書店 一九八九年）にも同じ記述がある。

*26 「都に住む祇王と申女」と言っており、舞を舞うことを条件に父との面会をゆるされているなどの点から、『平家物語』に登場する清盛の愛妾であった白拍子の祇王だろうか。ただしこの曲のほかは祇王の父親が紀州粉川にいたとする説を聞かない。

*27 古典文庫の『未刊謡曲集二十四』を参照した。引用は下村本による。なお、『未刊謡曲集二十四』所収の「籠祇王」は下村本、車屋本の二本があったが、内容に大きな差はみられなかった。古典文庫の解説によると、「籠祇王」は自家伝抄には世阿弥作とあるが確たる証拠はなく、成立は禅鳳以前の室町前期の作者未詳曲とのことである。

*28 「サテ我朝ニハ平ノ盛久也。此等ハ皆念シテ観音、遁タル刀杖ノ難ヲ証拠也。」とある。

*29 時が下って戦国時代になっても、辻説法の僧侶が「刀尋段段壊」の偈をしばしば持ち出して仏教の現世利益を語っていた様子がイエズス会宣教師たちの記録に出てくる。

*30 覚一本系統では、瀬尾太郎は一度は負傷した息子の小太郎を見捨てて逃げようとするが、老身の自分が逃げのびたところで主家である平家にどれほどの奉公ができようかと考え直し、

息子と共に死ぬために引き返す。瀬尾太郎は最後まで息子を守ろうと奮戦し、いよいよとなると息子を自らの手に掛けて果てるのである。「瀬尾太郎、矢七つ八つ射残したるを、さしつめひきつめさんく」に射る。死生はしらず、やにはに敵五六騎射落とす。其後打物抜いて、先小太郎が頸打落とし、敵の中へワツて入り、さむざんに戦ひ、敵あまた討ちとつて、つゐに打死してンげり。」また、『平治物語』に見られる朝長の最期も同様であろう。負傷し動けなくなった朝長は、逃走の際足手まといになることを自覚し、父に自分を殺して欲しいと言う。「中宮大夫進朝長、竜華越の軍に膝のふしを射させて、遠路を馳過、ふかき雪を徒にてわけさせ給ひしほどに、腫損じて、一足もはたらかせ給べきやうなし。「此いた手にて、御供申べしとも覚えず。とうくいとまたばせ給へ」と申されしかば、頭の殿「こらへつべくは供せよかし」と、世にあはれげにて仰られしかば、大夫進殿、泪をながさせ給て「かなふべくは、いかでか御手にかゝらんと申すべき」とて、御頸をのべさせ給たりしを、頭殿やがて打ちまいらせて、きぬ引かづけまいらせて、「大夫進が足をやみ候。不便にし給へ」とて、出させ給ひぬ。」

*31 『平家物語』巻九「敦盛最期」に「熊谷涙をおさへて申けるは、「たすけまいらせんとは存候へども、御方の軍兵雲霞のごとく候。よものがれさせ給はじ。人手にかけまいらせんより、同くは直実が手にかけまいらせて、後の御孝養をこそ仕候はめ」と申ければ、「ただとくとく頸をとれ」とぞのたまひける。熊

谷あまりにいとをしくて、いづくに刀をたつべしとおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、なくなく頸をぞかいてげる。」とある。熊谷直実の話は平曲として語られたのみならず、出家後の後日談も含め『天文雜記』にも抄出されており、中世で好まれた物語だったと考えられる。したがって、「いづくに刀をたつべしとおぼえず」という一文に触れた中世人は即、熊谷と敦盛のやりとりを想起したのではないか。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 84 March 2015

CONTENTS

A study of the word “Kudamono-Isogi” used in the Tale of Genji.

A study of the stereotyped tale based on Avalokitesvara Sutra.

A study of the similarities SOGA-no-Goro and MINAMOTO-no-Yoshitsune.

Junko WATASE 1

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2015